



妙たえ の光ひかり

通刊34号 復刊9号
1993年6月25日(季刊)
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町 角田浜
〒953 ☎0256-77-2025

アオバツク

この季節、妙光寺境内の夜は、ノリツケホーセ、ホーホーとフクロウが鳴き、池では蛙が合唱し、さらに時おりギャーギャーという猫の悲鳴かと思うムササビの声と賑やか。

そんなある日の早朝、中庭で花に水やり中の子供が、ガラス戸にぶつかってU字溝でバタついていているフクロウを見つけた。弱って飛べないので捕えたが、餌も飲み込めない程。凶鑑で調べるとフクロウ中最も普通の種類というアオバヅクらしい。友人の獣医に診てもらったら、外傷はないが口内出血と下痢で衰弱がひどい。レントゲンを撮って注射を二本、入院ということになった。

二日後、すっかり元気を回復して無事退院、送り届けもらった。子供達の絵のモデルになってもらい写真撮り、夕方元の所で放したら、愛敬のあるクリツとした黄色い目でしばし別れを惜しむかのようにした後、静かに林の中へ飛んで行った。心配した入院治療費は、野生の動物ということで無料。約束した子供達からの治療費のカンパは必要なくなった。

自身仏にならずしては父母をだにも救いがたし

小川英爾

毎年四月の妙光寺最大の年中行事「ご判様」は今年も三百人近い参詣者で賑わった。今回その準備から当日、後片づけまでを手伝ってくれたのが、私の所属する宗教研究所の後輩で松脇行眞という三十才のお上人。

生れも育ちも東京の在家、高校生の頃僧侶になりたいと思ひ、始めは禅宗を考えたが、本を読んで日蓮宗に変更、立正大学の仏教学部で学んだ。卒業後、世界中に仏舍利塔を建てたり、世界平和を祈る行動的宗教々団として有名な、日本山妙法寺の人達と行動を共にするなどしてきた。先頃の湾岸戦争では戦争反対を訴え、戦争終結直後のイラクに最初の日本人の一人として入国、一カ月間ウチワ太鼓一丁で国内を歩いた。そこで見た物は、当時のアメリカ軍の発表に反して、現実は無差別に近い爆撃の後の悲惨さだったという。住職にという誘いもあるが、制約の多いのがいやで、現在は鎌倉で住職不在の寺の留守番をしながら勉強したり、各地の人を訪ねて学ばせてもらっていると。独身の若々しい僧侶である。

この松協上人が帰って、後片づけも一段落して私が境内の掃除をしていると、明るくニコニコして声をかけてきた三十才位の女性、元氣そうな幼ない子を連れてくる。聞けば生まれが長野県で、結婚して千葉県に暮らし、近所に中山法華経寺があって、よく散歩に行くうちお経が耳に馴染み、早朝のお勤めにも出るようになった。修行僧に教えてもらってお経も少し読めるようになったが、夫の転勤で新潟市へ転居、お参りするところがなくなって困ってしまった。人づてに角田の妙光寺さんならと教えられ、もう何回かお参りさせてもらっている。お寺でお経を誦む会があったら仲間に入れて欲しいとのこと。残念ながら行事の時以外のお経の会は全て地区毎の檀家中心で、こういう方を受け入れる機会が今のところない。だがお寺にはいつでも寄って下さいと話した。それなら二人の子供が学校と幼稚園に行っている間の時間、何かお手伝いをさせて下さいとのありがたい話になった。

この二人との出会いはとても爽やかな印象で、同時に考えさせられるものがあった。いずれも親族が亡くなって

いて供養したいとか、特段困った問題、悩みを抱えてその解決を仏様に祈るといった目的がその信仰にあるわけではない。お経が好き、日蓮聖人が好き、その教えに引かれてというのが動機である。また誰かに強く勧められたわけでもない。ただ自分自身を大事にしながら仏様の教えを学び、実践することで自分自身の心を高めていこうとするものであろう。そこにとても爽やかな印象を与えるものがある。

通常、私達の信仰、信心には先祖の供養、亡き人への追善供養を目的にする場合と、祈願、祈りと呼ばれる、苦しみ悩みの解決をお願いする場合の二つが一般的である。ややもすると忙しいことを理由に、形だけ自分達に近い精霊へのお供え物、お参りだけで事を済ませ、祈願と言え、困ったときの自己中心的願いをかなえてもらおうとするのが多い。これが仏教の信仰だと思っている人すらある。簡単に言えばそこそこ先祖を敬い、りっぱな仏檀と墓を供えれば自分の来世も不安なく、困り事のときはお願いして救ってもらえば、後はなんとかなっていくと考えてはいないだろうか。

そもそも供養とは、仏様や先祖、死者の霊にお供え物をする物の供養だけでなく、仏様の教えを自分の身で実践する、そのことを供養するのが一番大切と説かれている。また生きて行く上での種々の悩み、苦しみから救われるためには、その苦しみから逃げることなくありのままに見つめ、その原因をつかんで、それにとらわれている自身の心が元とわかれば、その執着する心をなくすよう努力すること、そうすればその方策がわかると説かれている。要するに自分自身にウソをつかず、心をおちつかせてとらわれない素直な気持ちで日常生活を送る、ということになろうか。

仏様の教えを学び、少しでも心を近づけようということはこのことであり、結果として供養となり、生きる悩み苦しみから救われることとなる。その実践を先に紹介した二人に見た思いがしたのである。物質的に豊かになった現代、一方で心が貧しくなったと言われる。物質的に豊かになったからこそ仏教本来の実践ができる若い人が出てきたとも考えられないだろうか。

日蓮聖人は「自分自身が仏の心にならなくては、亡き父母を救う(真の供養)ことはできない」と遺されている。供養と祈願を別けて考えるのではなく、自分自身が仏様の教えを実践することを考えてみてはどうだろう。それがこれからの時代にますます大切で、また可能な時代だと思うのである。

寺の花咲か爺さん

小林 与志英 さん(75才)

巻の与市さん(屋号)の名で親しまれている小林さんは、家業の農業を息子さんにまかせ、今はお祖師様と妙光寺のことで頭が一杯。早起きで、冬のみだ暗い朝は綴じた広告紙の裏に写経を、日昼は土間に正座してワラ細工に専念する。作る物は毎年秋の彼岸に奉納する米俵三俵、正月用の宝船とそこに乗せる長さ十センチ余りのミニ俵に鶴までワラで作ってしまう。全て自身で工夫する。三年越しで取り組んでいるのが本堂前のあの松をワラ細工で作ろうというもの。枝ぶりを写生しては失敗をくり返し、仲々思うようにできないという。

暖かくなると息子さんの農作業の手伝いや、小遣い稼ぎの野菜や果物作りの合い間を見て、自転車で片道四十分かけて寺へ。奥さんのムツさんもニコ

ニコして送り出す。今は二年越しで境内にアジサイを植えようと、差し木でビニールポットに用意した苗木が二本。春先に連日通っていたる所に植え込んだ。これからはこの苗木が下草に負けないよう草刈りが大仕事である。

十八年前現住職の入寺記念に、参道に植えた八重桜がすっかり大きくなった。今年も四月のご判様のお練りの列が満開の花の下を通り、親しかつた総代の大滝さんと協力して奉納した石橋を渡った。これまでこの木の下草を刈り、水はけが悪いと材料持参で排水工事に汗を流してきたのもこの人。

「近頃境内がすっかりきれいになって、以前のお化け屋敷のような藪だらけの姿が想像もつかない」と感慨深げ。親の代から主に祖師堂に丹精込めてきて、最近だけでも天井板張り替え、

大提燈、お厨子の幕、常花、今年は木蓮華の金箔塗り替えを奉納してきた。しかし今、祖師堂全体の痛みがひどくなってきたことが気がかりだという。

九州の日蓮宗寺院を参拝して巡るのが夢だが、お金が溜ると寺に使ってしまうので一年延ばしになっている。アジサイの花が咲くのも見たいので、まだまだ元気になってはと言おう。女の人中心の巻講中を裏で支え、皆から頼りにされている大事な人である。



境内が緑に埋まります

お寺に行くたびに境内が整備されて気持ちがいい、という声が聞かれますが、本当にたくさんの方々のご協力のおかげです。

春先にも新潟市の遠藤茂五郎さんから大別しても四十種、千三百本余りの苗木をご寄附いただきました。ちなみにサツキ四百株、桜六種六十五本、椿三種九十本、その他樺、ハナカイドウ、ヤマボウシ、ハナミズキ、モミジ、梅、コナラ、クスギ、キンモクセイ等々、トラック三台山積みにして産地の埼玉県から運ばれて来ました。

遠藤さんは巻町五ヶ浜の出身。東京農大で造園を学んだ後、埼玉県でゴルフ場の芝を施工管理する会社を興し、このたび社長職を退任する記念に妙光

寺を緑で埋めようと申し出て下さったものです。

実は遠藤さんの生家は浄土真宗で、その関係上ご自身もそちらの檀家。亡き母親、先立たれた奥さんの実家、実兄の養子先がそれぞれ妙光寺檀家という縁で、妙光寺が好きだからのお話。これからもご協力下さるとのことです。恐縮しています。

五月に入って、境内整備を奉仕で指導下さっている野沢先生にお出かけいただき、植え込みを始めました。偶然にも先生は遠藤さんの農大の後輩に当ります。先生には安穩廟も設計いただきましたが、これまで東京の世田谷美術館、県内では味方村笹川邸の曾賀平沢記念館等、数々の造園設計の作品が

あります。また先日完成した皇居吹上御所の造園も、建築設計者と宮内庁の特命で設計管理されました。

境内に初期からの計画で東屋を建てようと、何年前に本堂裏の杉を倒し加工もできています。大きな石も宮沢工事の際掘り出してあります。池の山側の土地百五十坪も五ヶ浜出身の遠藤祐弘さんがご寄附下さいました。

材料と計画が整ったところで、もともと少ない工事費が底をついてしましますが、応援いただける方ございましたらお願いします。



夏におでかけになりませんか

第四回フェスティバル安穩の開催要

頃が別紙ご案内のように決まりました。基調講演をお願いした山折哲雄先生は、京都にある国立の国際日本文化研究センター教授で、専門の宗教学史、思想史では日本の第一人者です。ご自身死んだら葬式は不要とおっしゃっています。先生は住職の兄と同窓で親しく、また住職も何年前前に石川県門前町でのシンポジウムで同席させていただきました。縁もあり、快くお受けいただきました。基調講演の後、参加の一般の方を混じえて身近な葬儀の問題から宗教のありようまで、具体的に話を進めたいと思います。この機会に日頃の疑問、ご意見を皆さんにどんどん出していただきたいのです。助言者に文化庁宗務専

門職員で、天台宗僧侶でもある村上興匡さん。キリスト教を学んだ後、葬祭関係の雑誌編集長をされている碑文谷創さんから四人をお願いしました。

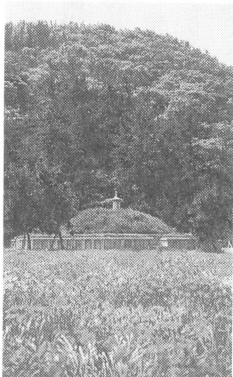
法要には昨年好評でした地元の太鼓グループが張り切っていますし、読経は安穩廟に関心を持つ住職の友人達が全国から集ってくれます。どうぞ気楽にお誘い合せお出かけ下さい。

二の廟建設工事も順調で、八月一日に開眼法要を行います。また周囲の畑に農事会社が種を採る目的で植えたのでしこが、赤やピンクの見事な花を咲かせ、通りかかると皆足を止めます。夏まではもたないと思うと残念です。

先日住職が出張の折、体調がすぐ

れないという函館のGさん宅にお邪魔しました。また一人娘をアメリカに嫁がせた東京のOさんご夫妻が、里帰りの娘さんとおいで下さいましたがお会いできず、住職が上京の際五日市町にお邪魔しました。他の方からもお手紙やお電話でのご相談もいろいろあります。どこまでお役に立てるかわかりませんが、仏事に限らずご遠慮なくご相談下さい。妙光寺には応援下さる医師も弁護士の方もいらっしゃいますから。

振込用紙を同封しましたので会費納入をお願いします。フェスティバル安穩のローソク献灯にもご協力賜われれば幸いです。



寺庭から

百年後の妙光寺



妙光寺のお隣に陶芸家の御夫婦が引越して来られた。スタジオを広く一般に開放し、体験スクールもある。

ご自身の作品はギャラリーに展示されている。また角田浜の広大な畑の中にワイン用の葡萄の木が植えられ、新しいワイン工場も完成する。私はアルコールはあまり飲まないが、地元のワインを小さなグラスに入れていただくのは気分がいい。時々こっそりと葡萄畑を見にゆくのを楽しみになった。そうそう、この葡萄の木は一本一万円でオーナーになれる。その後五年間自分の葡萄から作られたワインを毎年一本づついただける。ちょっとロマンチックでしょう。

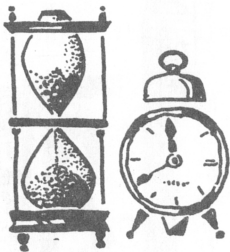
二、三年の間にこの地域は変化し続

けている。車で十分の所には温水プールのあるスポーツセンター、コンビニストア、村の中には食堂が二軒、出前もしてくれる。新しい道路の開通で新潟の繁華街までは三十分である。私がか此処に来た頃はこれが全部無かったのだから驚いてしまう。その上、海浴場、角田山の登山道、温泉、新鮮な魚、新鮮な野菜に果物、まだまだ自然もたくさん残っている。

これから先どのようなかわって行くのか想像もつかないが、あまり騒々しい発展はかんべんしてもらいたい。私は今のこの静かな、そして少し変わったもののあるこの土地が大好き。暮らしているひとが快適なのが一番いいと思う。

今妙光寺の境内では奉納いただいた苗木がどんどん植えられている。花木だけではなく、果樹もたくさんある。何十年か先には緑と花と果実、そしてそこに集まる野鳥や小動物でいっぱいになるだろう。もちろん我々も栗ひろいや果物狩り、お花見で楽しもう。そんな想像をしていると楽しくて楽しくてきりが無い。そして百年後の妙光寺は深い緑の森につつまれているかもしれないと思うと、泣きたくなるほど気持ちが高ぶってくる。

変化や発展にはどんなものにも、夢というエッセンスがあってほしい。



行事案内

七月三日～十六日

東京方面お盆柵経

例年通りに住職がお伺いします。

八月一日(日)

お盆墓参り、施餓鬼法要

午前5時半 墓経受付開始

午前10時半 安穩廟法要

午前11時 施餓鬼法要

昼 12時 おとき

午後1時 説教

日曜日に当り混雑が予想されます。

早い時間帯にお出かけ下さい。混雑するという理由で前日に来られても、準備等に対応できません。ご理解下さい。

各地区世話人の方が7月中旬に、護持会費のお願いと施餓鬼塔婆の受け付けに伺います。新潟市内初め遠方の方は郵送でご案内しますので、塔婆は7月中旬にお申し込みの上、八月一日または後

日、護持会費とともにお納め下さい。

八月十三日～十六日

お盆柵経

例年通り、住職とお手伝いの東京からお上人が手わけして全檀家に伺います。

八月十九日(水)

岩屋七面宮祭礼

午前10時半 本堂で法要・お加持

続いて岩屋へ移動、法要

昼 12時 おときはありませんが

参詣者全員に赤飯を供養

午後1時 説教

八月二十一・二日(土・日)

第四回フェスティバル安穩

安穩廟の供養祭。詳しくは案内書が

ありますのでそちらで。

九月二十三日(水)

秋のお彼岸中日法要

午前11時 秋季彼岸会法要

おとき、説教あります。

あとがき



三十才のときにやめて十年間吸わなかった煙草を、ひょんなことから口にして以来再開してしまいました。周囲の人には驚かれて、人がやめるというのにと言われると黙ってうつむいてしまいます。中には体に良くないんだからと、本気で心配してくれる婆ちゃんもいて……。

酒の席と原稿を書くときは、どうしても本数が増えます。吸い殻が山になった灰皿を見た娘にも「父ちゃん今日も不良になったな」と言われる始末。吸わなかったときにはもう煙草に用はないと思っていたのですが、いざ始まると思わぬと仲々やめられません。袷袷、衣の姿にそぐわないことはわかってい

すが。
(小川 記)